





十勝川水系のいきもの 2023

— 十勝川治水100年記念 —

 国立大学法人 北海道国立大学機構
 帯広畜産大学 野生生物保全管理技術養成事業

ヒグマとエゾシカ

ヒグマやエゾシカは移動に河畔林を利用します。河畔林は彼らにとってなくてはならない移動手段であり、生物の多様性を保つというメリットと、市街地や農耕地に害獣を導くというデメリットの、両面を持っています。野生動物の移動経路や生息地としての機能を維持しつつ、人やその生産物に対する被害をなくす、この両面を考慮して河畔林を適切に管理し、これらの大型動物と共存する方法を考えてゆかなければなりません。

河畔林で撮影されたヒグマ



河畔林で撮影されたエゾシカ



外来種のミンク

在来種と外来種

中型や小型の哺乳類も河畔林を利用しています。十勝川の支流である帯広川の市街地や農耕地沿いで調べた結果、食肉類（ネコの仲間）だけで8種が確認されました。しかし、もともと北海道にいた在来種はキタキツネ、クロテン、イイズナの3種だけで、残りのイエネコ、イヌ、ニホンイタチ、ミンク、アライグマの5種は人間の持ち込んだ外来種（移入種）でした。最近ではエゾタヌキ（在来種）の目撃例も増えています。



エゾクロテン

キタサンショウウオの成体



青く発光する卵のう

キタサンショウウオの発見

北海道にはエゾサンショウウオとキタサンショウウオの2種類が生息しています。北海道本島に全道的に分布するエゾサンショウウオと比べ、キタサンショウウオは釧路湿原でだけ確認されており、個体数の減少から環境省レッドリストで絶滅危惧IB類に指定されています。そのキタサンショウウオが2017年4月に上士幌町で再発見されました（1960年に記録あり）。2022年5月の調査では過去最多となる128個の卵のうが発見されました。

タンチョウ



川沿いを歩くタンチョウの親子

十勝では道内の他地域に先駆けて1998年から「タンチョウ十勝移住作戦」に取り組んできました。その結果、十勝川中流部では繁殖する個体も越冬する個体も順調に増え、2022年12月の調査では北海道内の越冬個体の分布は釧路668羽、十勝198羽、根室50羽、その他17羽となりました。釧路市で2022年11月に高病原性鳥インフルエンザのタンチョウが確認されたことにより、この取り組みはますます重要な意味を持つものとなってきています。

オジロワシ

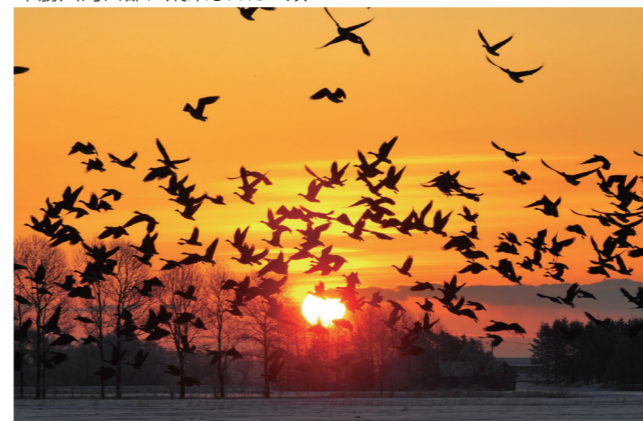
十勝地方で繁殖するオジロワシは増加しており、かつては上士幌、鹿追など内陸部の一部と豊頃の海岸部に限られた営巣場所が、十勝川水系に沿って内陸部に入り込んでいきました。2022年の調査では足寄、本別、浦幌、音更、池田、芽室、広尾、大樹、豊頃の13カ所で巣の存在が確認されています。またオオワシとともに11月～3月にかけて北方から飛来する個体もあり、サケなどの遡上期には川沿いでそれらの魚を餌とし、エゾシカの残滓なども利用しています。

十勝川の「ワシのなる木」



ガン類

十勝川河口部に飛来したガン類



ガン類は秋（9～11月）と春（3、4月）に河口とその付近の湖沼、河川敷、草地や畑に飛来する旅鳥です。十勝にはマガン、ヒシクイ（ヒシクイとオオヒシクイの2亜種）、ハクガン、シジュウカラガンが訪れます。年によって多い少ないはありますが、マガンとヒシクイは春に1000羽を超える群れがやってきます。ハクガンとシジュウカラガンはかつては滅多に日本に來ない珍鳥でしたが、最近では十勝に毎年コンスタントに多くの個体がやってきます。



サケとカラフトマス

サケ(シロザケ)は、産卵のため自分の生まれた川に8月下旬～11月にかけて戻ってきます。千代田新水路の魚道観察室「ととろーど」では、遡上してくるサケをカラフトマスなどと共に観察できます。サケはアイヌ民族にとって重要な魚であり、十勝で最も漁獲量の多い魚でもあります。カラフトマスも8月～11月にかけて河川を遡上して産卵します。カラフトマスは尾ビレなどに濃い色の斑点があり、腹が白いことなどでサケと区別できます。

「ととろーど」で観察されたサケ・サクラマス



旧晩成川を遡上するサケ

ヤマメとサクラマス

ヤマメとサクラマスは同じ種類ですが、海に降りて産卵のために遡上するものをサクラマス、降海前の幼魚と海に降りないで河川に残るものをヤマメと呼びます。サクラマスは桜の咲くころに川に遡上してくることからこう呼ばれますが、その後約4カ月をかけて成熟します。帯広市内のウツベツ川では川底を一部掘り下げ、サクラマスが遡上しやすいようにしています。なお、サケやサクラマスを川で釣ったり捕獲することは禁じられています。



川底のヤマメ

十勝川水系の魚類

十勝川水系には、先にあげたサケ・マス類以外にも多くの魚類が生息したり、海から遡上して産卵したりしています。イトウは生態に謎の部分が多い魚ですが、知られないままに生息数が激減しています。ハナカジカは十勝の河川に広く分布し、中流域から上流域に多く見られますが、生息場所として礫底を必要としています。シシャモも産卵は川で行い、10月上旬～12月下旬に産卵し、孵化後すぐに海に流されて沿岸で群生します。



イトウ



ハナカジカ



観光資源としてのいきもの

野生動物は観光資源としての利用も可能です。十勝川水系では、タンチョウの越冬地分散のため、温泉ホテル周辺でも冬季に餌付けを行っており宿泊客に人気です。ワシ・クルーズは11月～1月にかけて十勝川で行われ、ほぼ100%の確率でオオワシやオジロワシ、そしてタンチョウを見ることができ、インバウンドの観光客にも人気です。野生動物の観光利用については専門家の指導によるワイズユースを心がけることも大事です。



ホテル前の餌台に集まるタンチョウ



十勝川ワシ・クルーズ

十勝川水系のSDGs



十勝川中流部の人工湿地造成は、河川敷の維持・管理のための温室効果ガス排出を、目標値の45%を上回り、55%も削減しました(SDGs13)。また、湿地の造成により、タンチョウを始め陸域と水域の両方の生物がともに住める環境になり、生物種が215種から270種に増加しました(SDGs15)。これらの取り組みは多方面で高く評価され、活動主体である「十勝川市民協働会議」は日本水大賞の環境大臣賞やグリーンインフラ大賞の優秀賞を受賞しました。



地元高校生による生物多様性(魚類)調査

アイヌ民族と川のいきもの

十勝川を遡上するサケ類はアイヌ民族にとって重要な食資源でした。アシリチェフノミ(新しいサケを迎える儀式)は、その年最初に採れたサケをカムイ(神)に捧げる儀式で、十勝では9月上旬に十勝川エコロジーパークで開催されています。また、タンチョウの飛来は伝統的な行事である「サロルンリムセ(鶴の舞)」の開催に華を添え、アイヌ文化の継承に貢献しています(SDGs17)。



アシリチェフノミ(新しいサケを迎える儀式)



サロルンリムセ(鶴の舞)



—リーフレット作成協力、資料・写真提供（五十音順）—

アークコーポレーション、大熊勳、太田奈緒、小山勉、坂本さや香、塩原真、十勝川中流部市民協働会議、十勝毎日新聞社、広沢圭司、北海道開発局、松本朋華、三好淳子、柳川久（文責）、吉松大基

※本冊子は「十勝川治水100年記念事業」の一環として「帯広畜産大学 野生生物安全管理技術養成事業」により作成しました。
「帯広畜産大学 野生生物安全管理技術養成事業」について、詳しくはこちら <https://www.obihiro.ac.jp/biodiversity>



2023年2月20日発行